

学校体育特集「体育の学習環境を考える」 1968年6月

体育における学習環境の条件

東京教育大学講師 佐伯聡夫 より

【 発 表 内 容 】

I. 要 旨

1. 学習と環境

- ・ 人間の学習は、主体をとりまく人々の結びつき(社会的環境)と文化との相互作用の過程であり、それに基づく行動の望ましい変容過程である。即ち社会的・文化的価値によって意味づけられた主体の変容なのである。

2. 体育における学習と環境

- ・ 体育における学習環境は、授業に限定して、教材としての運動(文化的環境)、学習集団を中心とする人間のかかわり合い(社会的環境)、運動の施設・用具や学習の機器(物的環境)と社会的でもあり、また文化的な性格を持つ教師との4環境要素に類型化されることができる。

望ましい体育学習の条件

(1)物的環境

- ・ 運動の施設や用具は活動の動機づけとして重要であると同時に、1つの学習の課題となり、また内容の一部となる。体育学習における物的環境は課題の変化に対応しうる多様性と可変性をもたなければならない。また学習の自発性と共同性が十分に保障されるものでなければならない。

(2)教材

- ・ 教材は常に子どもにとって前向きの課題である。しかし、その課題は子どもたちの自発性と共同性を保障するように設定されなければならないし、課題の各々がどのように教育的意味を担っているか明らかでなければならないのである。

(3)学習集団

- ・ 学習集団が、子どもたちの学習活動の過程で、与えられた強制的集団から、実質的には生み出された自発的集団へ変容してゆく中に、望ましい社会と人間の形成に志向する教育の鍵が存在すると言ってもよい。

(4)教師

- ・ 教師の役割は、社会の要求と子どもの内発的な発展性向とを調節し、望ましい社会と人間の形成に、その諸力を志向させることだとも言える。

教師の役割は、環境の一要素というより、他のすべての環境要素の諸教育力を高

め、それを学習に有効に作用させる、いわば環境要素の条件づけの働きだともいえよう。

II. 要 約

1. 学習と環境

- 人間の成長や発達、主体と環境との有効的な相互作用の結果である。
生物的存在としての人間の内的な力(遺伝)の主要因の求められる成熟
社会的・文化的存在としての人間の外的な力に主要因の求められる学習
- 環境…自然的環境、社会的環境、文化的環境
自然的環境が人間の行動に影響を及ぼす諸条件として重要
社会的・文化的環境は、人間行動の内容を形成し、主体の構造を決定するという意味から、学習論にとってはより一層重要
社会的環境は人々の結びつきを中心にみた環境で、人間関係(地位や役割)ともいえる。
文化的環境は人間行動の規範や価値である。

2. 体育における学習と環境

- 体育における学習は、一定の物的場を基盤にした運動を核とする文化の学習と、それにもとづく人間の結びつきの学習とに分けて考えることができるが、環境論の立場からいえば、それは文化環境と主体との、社会環境と主体との相互作用とみることができる。

〈環境要素について望ましい体育学習の条件〉

(1) 物的環境

- どんなに立派で整備された施設や用具がおかれていても、それが子どもの自発的な意識によって意味づけられなければ学習の環境としては実質的な意味を失うことになる。

巨大な公共体育施設の使用が低調なのは、それが住民のプレイの想像力を圧倒する程、現実的で立派すぎるところに一つの要因がありはしないだろうか。整備され、与えられたものとしか受けとられない物的環境は、ある場合には、むしろ子どもの学習体験をまずしいものにする恐れがある。

(2) 教材

- 体育の学習における文化的環境の直接的なものは、教材としての運動文化に他ならない、それは運動文化が内包している技術、方法、思想、価値等を子どもの興味、能力、レディネスに対応して考えたものである。しかし、卒業後の生活における運動学習の意味が疑問視される状況になってきている。

プレイ論は、文化と人間との最も始源的接点を見出しているという意味で、教科カリキュラムと経験カリキュラムの対立を止揚する可能性をもつと同時に、運動文化研究からの体育科教育論を、運動文化それ自身の申に人間形成の論理をさぐるという意味において提起している。人間にとって運動文化とは何か真に問われている状況なのである。

(3) 学習集団

- 人は誰しも彼の所属する集団の考え方や行動の仕方を、しらずしらずに身につけるようになる。

学習集団は子どもにとって具体的な学習活動における「社会」の最も直接的なものであるから、そのあり方は、どのようなものとして社会や人間の結びつきを考えるかを学ぶ最も重要な意味をもつものである。

望ましい社会は異質の人々が、それぞれの立場で、各々を尊重し合い協力して生きてゆく社会である。異質な人々が共同の課題に向かって協同してゆく姿を学習集団の中に育てることが重要である。

子どもの相互関係は、課題に対応して役割の交換が可能な水平的関係に基盤を置いた、教え合い、助け合いであり、子どもはそれに基づいて学習意欲を高め、集団のきまりを作り、守り、役割を果し、要求をもつ等の共同や競争の実質的意味を学習するのである。

(4) 教師

- ・ 体育授業をと惨まく学習環境は、授業場面を構成する直接的な環境と、地域社会や国にまで広がる社会や文化等の関節的な環境とがあるわけであるが、教師はいわばこの二重の環境をつなぎ合わせて、子どものパーソナリティに内面化する役割を受け持っている。

教師には、変動する社会を見通す力と、現実の社会に適応しながら変革に志向する柔軟性が、教科と、その背景にある科学(運動文化と科学)の専門的理解とが合わせて要求されるし、更には個的であり、かつまた類的な存在でもある子どもたちの人間性に対する深い認識を教師の能力と論理としてもつことが要求されるのである。

教師としての資質のたえざる練磨と、その資質を学習に生かすためには、教師は常に教師集団として相互批判と援助とを続けなければならない。

おわりに

- ・ 私達に要求されているのは、環境論という静態的なものではない。主体の価値的な意識によって切りとられた意味論的な環境業状況こそが問われるべきである。

Ⅲ. 所 感

- ・ このテーマを見たとき、それぞれの個にあった用具が大事だということかなと思いました。

読んでみると内容は深く、環境として教師も入っていたので、感動し、勉強しました。そして教師が何といても一番重要だと思いに至りました。教師の役割を読んで、教師になる努力は簡単ではないと思いました。「教材」のところでも、教師があれこれ線などを引いて、作ったルールは子どもの学習を妨げるとよく言われましたが、この論文でよくわかったという気がしました。

Ⅳ. 論 点

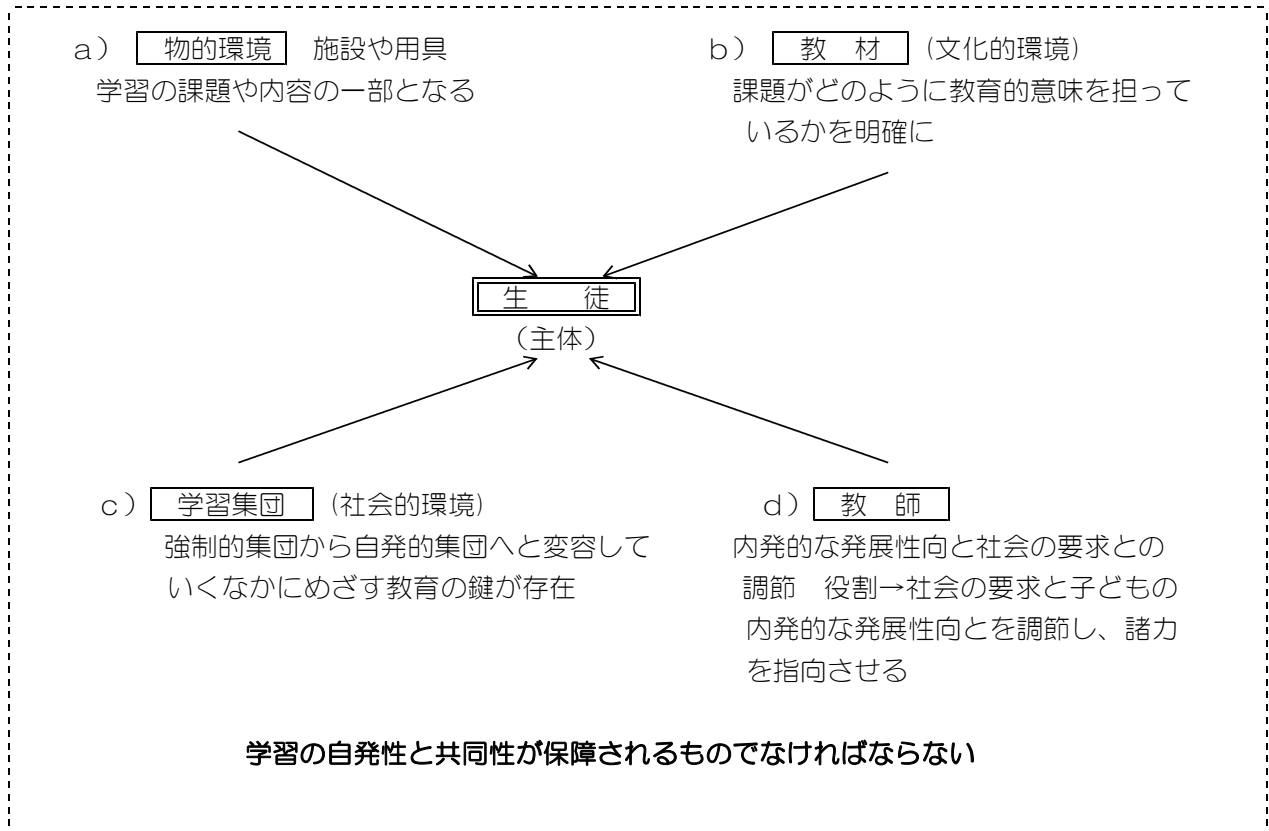
- ・ 具体的に望ましい体育における自発的学習集団の姿を話し合いたいと思いました。
- ・ 終わりに述べられている「主体の価値的な意識によって切りとられた意味論的な環境＝状況こそが問われるべきである」のところを話し合いたいです。

【 討 議 内 容 】

1) 約60年前の論文ではあるが、現代の教科としての「体育科」、その指導者としての「教師」、そして「スポーツ」の在り方・指向する方向性に重要な問いかけを発する論文を紹介し、その中でも重要な役割を果たす「教師」にもう一度目を向け、教師は「子どもの自発的な発展性向と社会の要求の調節」「人間（人格）形成と望ましい社会の実現」にいろいろな力を結集させる役割を果たすことに努力しなければならないのではないかと訴える今回の発表であった。

2) 内容の整理

①望ましい害行く学習の条件



②教師に求められる良いとされる面 と望ましくないとされる面

〈良いとされる面〉	〈望ましくないとされる面〉
a) 内発的動機づけ (学習意欲) 自発的。自分で目標をつくる。	外発的動機づけ
b) 学ぶ楽しみ 創造性。遊び 自分だけの評価	押しつけられる 訓練 強制
c) 相互課題・目標 子どもの自己評価、子ども自身の「振り返りカード」と教師の評価	指示される課題 (1つ or いくつか) 教師によって評価がなされる、 集団の他の子からの評価もある ※「評価」ということが出てきて難しい
d) 動的 その人自身が主体的に価値観を持って行動していく	静的 この人はこういう人だというような 固定的な人間観

3) 環境としての学習集団

子どもたちは、作られた学級集団やクラスの中で与えられたグループの中で、与えられた課題や自分たちで決めた課題を達成していくうちに、自発的な集団へと変容していく。その過程で望ましい「社会」と「人間」の形成に志向する教育の鍵が存在する。

個人は、例えば「跳び箱」の課題で、ある子は「○段を跳び越える」、ある子は「跳び形にこだわる」、「難易度の高い技をみにつけたい」、また別の子は「跳び越せなくても、できるだけ前の方に手を付けることのできる段階をめざす」といった具合に、それぞれの目標を掲げ、それに向かって努力をする。そのうち、跳び箱が得意な子が集団を仕切ったり、できない子へのアドバイスをしたりして、集団を牽引したり、仕切ったりし、それに従う子もできてくる。

4) 教師の役割と教育の現状・現場

- ・ 教師の役割は、子どもの主体性・自主性、内発性と、「社会的要求」「文化的要求」などをどう結びつけ、協同（協働）して課題を解決達成していくかをバックアップすることだろう。また、一方で競争においても、ただ勝負にこだわるのではなく、その結果に至るまでのプロセスを考えてみることによって、努力の結果であったり、ここが足りなかったのが今後の改善資料にしようとか反省から生まれるものがあることも気付かせることができるだろう。

- ・ 今日、「学習指導要領」が、ここまでは教えなければならないとか、このようにしなければならないとされ、ある意味教師にとっては強迫的になっているところもあるように見受けられる。

- ・ 教師が考えた教材を実施するより、子どもたちの自発的な考えに基づく行為の方が、より生き生きとしたものになる。マスローの理論にも叶い、この理論の勉強をするきっかけともなった。

- ・ 教師の企画した行事を都合により中止したことがあった。そのことを校内放送で知らせた途端に喜び、校内の端にある自然林園で走り回ったり、木の枝に捕まったり、ワーワー、キャーキャー元気に、喜び一杯に心の底から愉しんでいた。自然の中で遊ぶ方が心より愉しみ・喜んでいるようだ。教師のつくる遊びでは、子どもたちは喜ばない、枠の中の遊びには、束縛のようなものを子どもたちは感じ取っているのだろうか。

- ・ 教材の目的に、「なぜ、この教育に意味があるのか」「できた、達成できたという成功感・心の底からの喜び」というものが含まれていなければならないが、一方で方法論が幅を効かせている。

- ・ 将来の子どもの人間性に、どのように結びつき、どう育てたいのかという教育実践が重要だ。

- ・ 「受験」をどう考えていくか。教育の結果をどう評価していくか。どちらも大きな問題だ。

- ・ 生徒一人ひとりを大切に、グループで話し合わせ、自分たちで創作したり、集団美を鑑賞したりといろいろと工夫・実践している教師もたくさんいる。

一方で、教師としてしっかりやっとうとしている教師を潰してしまっている教育の現場もある。現実の重圧、大量の仕事、多忙さ、困難さ、制約、上からの指図・命令など、あげればキリのない困難な現状があることも忘れてはならない。

- ・ 大学からは下の学校(小中高)でなぜもっと基礎づくりをきちりやっとうこないのか、高校からは中高へ、中学からは小学校へと、同じ嘆きともいえる声が発せられる。先ほどの意見の中にもあった各段階の学校教育の規制枠、指導要領に基づく枠(ここまで教えなければならない)や受験のみの教育しか考えない一部の保護者の存在など、「問題」は尽きない。

- ・ 特別支援学校では、障がいをもつ生徒一人ひとりに応じた目標・実践計画をもち指導する。そのとき5～6の生徒に対して、3人の教師が付き、目が行き届く。

・日本の学校制度では「落第」を嫌う。外国では落第を別に何とも気にしない。その学年に囚われないからだ。上下の学年と一緒にわかるまで、できるまでやって、次の学年へ進む。科目を重視し、その科目毎に次の学年へ移る。だから、年上の子、年下の子と机を並べてもなんとも感じない。それが当たり前。「できる・喜ぶ・納得」が日常当たり前のことだと、子ども・保護者・教師・社会がそう思っている。日本が特殊かもしれない。

5) 「個人の(自主性) 尊重・育成と共同性の保障」を同時に成り立たせるには？

・先の「跳び箱」の例でいうと、個人では、自分の目標を立てさせる。頑張っている子がいるから私も頑張ろうという意欲を持たせる。その次にできた子をみんなで誉め合う。みんなでもどのようにすれば跳べるようになるかを考える。このような実践がある。

・「個人種目」と「集団種目」とに分けて考える。個人種目では個人の目標、成功の喜び、楽しさなどを味わい体験することを目標とし、後者の集団科目では、どうすればみんなで勝つことができるのかを話し合い、勝ったときの喜びや感動をみんな協働してことを成し遂げたのだという体験を共有できるように指導する。

6) 「勝つ」ということから〈教師〉の立場と、〈指導者〉(部活など)の立場には違いもあると思うが…

・スポーツの体育には2つの面がある。一つは誰でもが参加でき、楽しむことのできる「生涯(大衆)スポーツ」。もう一つは、選手として自分が望んで目標達成のために行う「チャンピオンスポーツ」である。前者はある意味「教育化」している面がある。教育者として教師が参加する場合も。安全面に一番気を遣う。その種目の底辺の拡大を狙うこともある。後者は、トーナメント方式の勝負にこだわる面から、勝つことでの達成感・喜びを味わわせてやりたいと指導する。

・ある保護者が、「うちの子が上手なのになせ出場させないのか？」という愚痴・文句を言ってくるというケースも起こってきている。高校野球のある監督は「どんなことをしてでも、うちは絶対に勝たないといけないんです。そのところをご理解していただきたい」と言ったことがあった。「高校」という教育を行うところで、人間形成を担うところで「勝つこと」だけが目標と言うのはどうだろうか？ いろいろな考えがある。

・上手でできる子は楽しい、一方で、できずに楽しくない子もいる。その中間に楽しいスポーツをおくことができれば、誰もが納得のいく一番理想な姿だろうと思う。チクセントミハイの「フロー体験」理論はそれを指している。が、現実はそのポイントを定めることが難しい。

・特別のクラブで、できる子を見本にし、できない子と比べ、どこができないのかという点を指導することがある。剣道などでは「師範」といわれる人が見本を示すことがある。指導者は見本を示しながらテクニックを指導するが、自分ができない場合はできる人を見本にさせることもある。

7) Sport と Game の違い

・スポーツは、教育でもあり、「克己」すなわち「自分の弱い気持ちや弱点に打ち勝つ、克服する」という面がある。一方、Game は「獲物を捕まえる」を意味し、獲物を捕まえないと生きていけないというところから来ている。つまり、他者に対して「勝つ」ことが宿命となる。

8) 日本のスポーツ観の推移

・一昔前には、大学の名前を有名なものにするためにも「体育会」を中心とした勝負にこだわった風習があった。「1年＝奴隷、2年＝平民、3年＝貴族、4年＝天皇」といわれ、上下関係が厳しく、下学年の者は上級生に対しては絶対服従、勝つためには手段を選ばず、という風土があった。無条件の盲目的絶対服従、反対の意見は言えない、下積みの苦行生活に耐える、精神的追い詰め、一気飲みの強要などの封建的ともいえる風習である。しかし、一方で礼儀正しい、しっかり挨拶ができる、文句は言わず雑用をこなす、といった点から、就

職には有利とされた。

しかし、最近はこういった傾向に対して、民主的で、開放的・明朗なルールに則った組織運営・育てるスポーツへと改革されつつある。権威に傘をかぶるのではなく、民主的に互いに話し合いをし、意見交換をして納得の上に競技力の向上をめざすという方向へと脱皮しつつあるように思える。

9) 課題と問題

・ 課題を教師が設定・提示し、その子らしい問題とは何かをそのことともに考え、その問題を解決していく。その過程を繰り返す。別には、子ども自身が問題・課題を考え、それを実際にやってみて答えや結論を出す。そのプロセスが大切なのであり、教師はそれを評価する。それがその子の将来に身につけ、役立つように祈りながら……。

10) 教師も変容・成長・発展していくことの重要性を再認識させられた発表でした。大いに意義のある研究会となりました。